倫理の空白Ⅳ

研究活動のグレーゾーン2

人文・社会科学編 あらすじ

●大学院への進学 清水 由香 明立大学 心理学部 学部3年 井原 誠 明立大学 心理学部 学部3年 田辺 孝太郎 明立大学 心理学部 教授 森島 恵美 明立大学 心理学部 准教授	・大学3年の秋。ともに大学院を目指す清水由香と井原誠。できることなら博士課程まで進みたい清水は、井原から森島恵美准教授の研究室を薦められる。研究職を目指さずに就職を考えている井原は田辺孝太郎教授の研究室に入ることを希望している。
●博士号を目指す 清水 由香 明立大学大学院 心理学研究科 修士１年 井原 誠 明立大学大学院 心理学研究科 修士１年	・森島の研究室に入った清水は純粋に好きな心理学で博士号を目指す。清水にとって初めての心理学実験。アメリカの研究チームが行った実験について日本でも再現される現象か、再現実験することで論文を書くことに。清水は論文が学術誌に掲載されることによって奨学金を獲得した研究生活を目指している。
●実験についてのアドバイス 大山 健二 明立大学大学院 心理学研究科 研究員（ポスドク）	・実験について清水は、森島の研究室に在籍するポスドク・大山健二からアドバイスをもらっている。電子ラボノートを確認してもらい、インフォームドコンセントやデータ管理の重要性について説明を受ける。
●結果を解析するが仮説にそぐわない	・論文執筆に向けて清水は出そろった実験の結果を解析するが仮説にそぐわないことに気落ちし、奨学金の獲得にも危機感を募らせる。さらに母からの電話が経済的な不安に追い打ちをかける。

●論文として成立しない	・森島から実験のまとめを見せるように声をかけられる清水。元の実験のようには再現出来なかったため、どうしたらいいかわからない。実験で仮説が支持されなければ、論文として成立しない。そんなとき論文を書くうえでヒントになりそうな話を井原から聞く。清水はデータを解析しなおし、仮説を新たに書き換えて論文を進める。
●仮説と結果の関係がひっくり返る	・途中報告の論文を森島に見せる清水。結果がわかってから仮説を後付けした論文になるため、新たな仮説で改めてデータをとって論文を書き直す必要があるとダメ出しを受ける。
●仮説の再現は失敗したが実験が失敗だったわけではない	・大山のアドバイスから、清水は森島に論文の指導について確認。そこで森島の意図を初めて知り、安堵しつつも脱力する。仮説の再現が失敗した実験の過程と結果の論文を書いて、さらに新たな仮説で再実験をして論文を書くかどうか。論文によって業績をつくることに全力を尽くす決心のもと、清水は一人再実験の準備をする。